



1. 多様化社会の社会的施設
2. 独善の否定
3. 予知科学の進展をのぞむ

1. 最近おこった歩道橋論争と公団住宅の温室訴訟の二つの問題は、社会的施設に対する評価の多様化あるいは個性化の徴候であるといえないであろうか。

元来、社会資本の多くは、当然のことながら人のマスを対象として整備されてきた。つまり、人の行動の平均値的あるいは最大公約数的なものを対象として、社会的施設が計画され、設計され、建設されてきたといえる。しかし、その結果、ややもすると究極の利用者である個人の存在を意識することなく、それらの建設事業が進められる嫌いがあったようにみうけられる。特に、この傾向は戦後の大量施工時代に著しくなったのではなからうか。さらに資源配分の観点から、社会資本投資の判断基準として、しばしば経済的効率性が強く第一面に押し出されたため、一部に弊害やアンバランスが生じはじめている面もどうかえる。

これからの社会にあっては、人々の生活行動や価値観はますます多様化し、個性化し、社会的施設に対する欲求は多面的にならう。たとえば、河川改修にあっては人命と財産の保護が第一の使命であるが、憩いを与える堤の緑と並木の美しさへの期待も高まらう。港の防波堤は港と船の安全を守り、利用の効率を高める使命をもつが、人々にとっては好適な釣り場ともなる。それを規制すべき地区もあろうが、反面、安全な釣り場として万一のときに対する施設上の配慮も必要とならう。建設事業における人間的な血のかよったささやかな配慮が、社会施設としての市民へのサービスの厚みを増し、豊かな環境造りへの第一歩となるのではなからうか。 [J]

2. トピックスの担当もこれが最後となった。わずかな字数と、わずかな回数だったが執筆するにはかなり荷のかかる仕事だった。毎日の新聞紙面が待遠しく、これはと思える記事に出会うと、ほっとする思いがした。今月も何にしようかと迷っている間に締切日が迫り、題目未定のまま筆を執ろうとしている矢先に三島由紀夫のニュースが入ってきた。このニュースのあまりに強い印象が他のすべてを打消してしまった。この件には千差万別の把握法があろうが、筆者は三島の独善的な行動にまず非難の意を覚えた。なぜなら、彼がみずから命を絶つことは自由かもしれないが、彼ほど高名な男があのような言動の後あのような手段で世を去ることが、どれだけ内外に影響を与えそれが迷惑を及ぼすものかを考える義務が彼にはあったのではなからうか。恵まれた才能と、社会的名勢を天から与えられた男のエゴイズムをこの件に感ずるのは筆者のみであろうか。

才能と地位を十分に与えられたとき、人間がどのような方向に走りたがるものかを思い浮べるとき、われわれエンジニアも得てして似た道筋をたどりたがる傾向なしとはいいい切れぬような気がする。われわれがたずさわる土木工学はその所業のすべてが後世への遺産として残るものであることを考えるならば、その技術の行為には無意識ではあっても、独善を入れることは許されないのではないだろうか。 [C]

3. 最近のニュースは、ひと頃の人間は炭酸ガスを出すから公害である式のたかぶりもきえ、地道になったが、これら一連の公害記事を見るにつけ、謙虚に反省を求められるのは、ここまでの事態を予見し、処理する力が不足していたことである。大気の中の複雑な外力を突破して、決められた月面の一点に人間が降り立つ時勢である。地震の予知の可能性が云われる当節である。われわれの世界でも、土木の対称は千差万別、他の工学と異なり、複雑すぎて定量的に把握することは困難なものばかりであることを理由に、不可抗力、天災的なものとして、社会に、いつまで容認を求めることができるだろうか。反省する必要があるようだ。

千差万別であるからこそ、数多くの情報を積極的に入手し、科学的に予知する必要度が高いはずであるのに、現状は必ずしもそうでないと思われる。土木のエリアは広範で多岐に分化しているのだから、分野、分野で問題点に差違があると思われるが、たとえば、トンネルの場合、事前の調査と先人に教わった学識と豊富な経験で対象物のもつ特性を洞察し、問題点を予知し、処理しているのが実状である。

土木の世界が、あまりにも経験的要素が強すぎることも、計測工学的分野の発達にブレーキをかけている一因であろうが、今後工事の事故はいうにおよばず、省力化、工事のスピードアップが加速度的に要請されることを考えると、あらかじめ事態を予見し、処理する積極的な姿勢があつてこそ時流の要請を解決し、技術の進歩にもつながるものと思う。意識の高揚とともに、計測装置の開発を含めた予知科学の発展を望む。 [S]